

展覧会スケジュール

■企画展示

ア・ターブル!—ごはんだよ!食をめぐる美の饗宴—

2014年3月1日[土]—5月6日[火]

観覧料:一般900(700)円/高・大生700(500)円/小中生400(300)円
()内は前売りおよび20名以上の団体料金 ※4月1日以降は、高校生以下無料

- 講演会「美術に見る飲食」
講師:宮下規久朗氏(神戸大学大学院人文学研究科 教授)
5月3日[土] 14:00—/場所:三重県立美術館講堂
『食べる西洋美術史』や『モチーフで読む美術史』の著者が、食や食事にまつわる様々な美術表現をご紹介します。
- ワークショップ「絵になるデザート」
講師:holiday(堀出隼氏+堀出美沙氏)
3月22日[土] 14:00—/場所:三重県立美術館美術体験室
色とりどりのクリームやクッキーを使って、絵画のようなデザートを作成します。
対象:どなたでも(小学生以下は保護者同伴のこと)/定員:20名参加費:500円
往復はがきによる事前申込みが必要です。①名前②電話番号③返信面に返信先をご記入の上、〒514-0007 三重県津市大谷町11 三重県立美術館「ア・ターブル!展ワークショップ」係までお送りください。3月8日[土]必着。応募多数の場合は抽選。ハガキ1通につき1名(小学生以下+保護者の場合は2名)のみ有効。
- スペシャル・ギャラリー・トーク
①シェフとめぐる「美の饗宴」
講師:出口直希氏(ミューゼ・ボンヴィヴァン シェフ)/4月6日[日] 14:00—
②江戸の情報社会と食
講師:畑有紀氏(名古屋大学大学院国際言語文化研究科 博士後期課程)
3月30日[日]、4月13日[日] いずれも14:00—
③「酒飯論絵巻」について
講師:伊藤信博氏(名古屋大学大学院国際言語文化研究科 助教)
4月27日[日]、5月4日[日] いずれも14:00—
④担当学芸員によるギャラリー・トーク
3月23日[日]、4月20日[日] いずれも14:00—
※ギャラリー・トークはいずれも展示室に入室するため観覧券が必要です。

福田豊四郎展

2014年5月20日[火]—6月29日[日]

観覧料:一般900(700)円/学生700(500)円/高校生以下無料
()内は前売りおよび20名以上の団体料金

生誕140年 中澤弘光展

2014年7月12日[土]—9月7日[日]

観覧料:一般900(700)円/学生700(500)円/高校生以下無料
()内は前売りおよび20名以上の団体料金

■常設展示

美術館のコレクション

【第Ⅳ期】2014年1月4日[土]—3月23日[日]

常設展示室の一部において、「一ふるさと知事ネットワーク(三重・福井)美術館交流—特集展示 岩佐又兵衛」(1月4日[土]—3月2日[日])を開催します。

【第Ⅰ期】2014年3月25日[火]—6月22日[日]

【第Ⅱ期】2014年6月24日[火]—9月21日[日]

柳原義達記念館 柳原義達の芸術/特集展示

【第Ⅳ期】2014年1月4日[火]—3月23日[日]

【第Ⅰ期】2014年3月25日[火]—6月22日[日]

【第Ⅱ期】2014年6月24日[火]—9月21日[日]

展示室Aにおいて「特集展示 甲谷武」(7月1日[火]—9月28日[日])を開催します。

※会期が変動しますので、ご注意ください。

「三重県立美術館友の会」へのお誘い

友の会は三重県立美術館を支える団体として活動しています。研修旅行、美術講演会、懇親会等、会員同士の楽しい交流や美術の教養を深める催しに参加できます。

○年会費:一般会員3,000円(入会金500円)/ベア会員5,000円(入会金1,000円)

○特典:会員鑑賞券配付、観覧料半額割引、レストラン・ミュージアムショップご利用割引等。詳細は三重県立美術館友の会事務局(TEL 059-227-2232)までお問い合わせください。

「公益財団法人 三重県立美術館協会賛助会員」へのお誘い

美術館の調査・研究事業補助、カタログなど美術資料の作成頒布等、美術館活動活性化のための事業をおこなっています。主旨にご賛同いただき、賛助会員へのご加入をお願いします。

○会費:年間一口個人25,000円/法人50,000円/準会員10,000円

○特典:展覧会ならびにレセプションへの招待、各展覧会のカタログ呈呈等。詳細は三重県立美術館協会事務局(TEL:059-227-2232)までお問い合わせください。



利用のご案内

■開館時間 午前9時30分—午後5時(入館は午後4時30分まで)

■休館日

月曜日(祝日休日にあたる場合は開館、翌日(祝日の場合は翌々日)閉館)
[2014年5月7日(水)、7月22日(火)、9月16日(火)]※4月28日(月)は開館
年未年始[2014年12月29日(月)から2015年1月3日(土)]

■観覧料

【常設展示の場合】〈美術館のコレクション+柳原義達の芸術/特集展示〉

●2014年3月30日[日]まで
一般300(240)円/高・大生200(160)円/65歳以上の方、中学生以下無料
()内は20名以上の団体料金

●2014年4月1日[火]より、料金体系が下記の通り変更となります。
一般300(240)円/学生(大学・各種専門学校等)200(160)円/高校生以下無料
()内は20名以上の団体料金 ※65歳以上の方は、一般料金となります。

【企画展示の場合】その都度定めます。

※学校の教育活動として県内の小・中・高・特別支援学校等が観覧する場合、障がい者手帳等をお持ちの方および付き添いの方1名が観覧する場合は無料。
※2014年4月より、家庭の日(毎月第3日曜日)の観覧料は各展覧会(企画展/常設展)の団体割引料金となります。

■メールマガジン

三重県立美術館の情報を月2回、みなさんのパソコン、携帯電話へお届けします。購読料無料。詳しくは、美術館ホームページをご覧ください。

■美術館公式twitter

三重県立美術館の最新情報をリアルタイムで配信しています。
Follow us on Twitter@mie_kenbi

■交通

津駅(近鉄・JR)西口より徒歩10分または、津駅西口1番のりばより三重交通バス西団地循環、津西ハイタウン行き(東団地経由)、夢が丘団地行き(総合文化センター前経由)、総合文化センター行き乗車2分、「美術館前」下車徒歩1分
※できる限り公共交通機関をご利用ください



三重県立美術館 Mie Prefectural Art Museum

〒514-0007 津市大谷町11
Tel: 059-227-2100 Fax: 059-223-0570
<http://www.bunka.pref.mie.lg.jp/art-museum/>



今年度、本誌「HILL WIND」(三重県立美術館ニュース)¹が内容・誌面デザインともに大幅なリニューアルを遂げたということは、いったいどのくらいの方にお気づきいただけたでしょうか。A5判8頁からA4判8頁へ。紙の面積だけ比較しても2倍に拡大している。ページを繰れば、目に飛び込んでくるのは細かい文字の海。あらゆる印刷物が、全般的に薄く読みやすくなる傾向のある今日において、なぜこの一見アナクロニックとも解せるリニューアルを敢行したのか。本記事では、この改変について釈明すべく、美術館ニュースの現状やリニューアルの経緯等に触れることとしたい。

1. 「美術館ニュース」の概要

そもそも「美術館ニュース」(以下、ニュースと表記)²とは何か。——全国各地の美術館が定期的に発行する広報誌であり、多くは冊子の形状をとる。ニュース刊行は美術館の広報・普及活動の一環で、学芸員等が記事の執筆・編集を担当する。印刷されたニュースは館内設置、関係者への送付等の方法で頒布される——辞書的に説明しようとするれば、以上のようになるだろう。

開催中の展覧会に関する話題から、イベントレポート、所蔵品研究に至るまで、ニュース記事の性格は多様を極めており、誌面の記事配分には各館の個性が発揮される。また近年は、紙媒体のニュース配布にとどまらず、多くの館でPDFファイルがホームページへアップロードされる等、複数公開手段の併用もずいぶん普及してきている。

ニュースの歴史は古く、時としてその創刊は開館前後まで遡る。1952年に開館した東京国立近代美術館は、開館2周年を迎えた1954年に美術館ニュース「現代の眼」を創刊している。2013年、同誌は600号刊行に際し、内容・誌面デザインのリニューアルを行い、印刷という従来の形式は保ちつつ、新たに電子媒体での公開も開始した³。

ニュースの判型のうち最も一般的と言えるものはおそらくA4判だが、誌面デザインの革新もさまざまな美術館で試みられている。例えば、福岡市美術館の美術館情報誌「エスプラナード」は2013年4月発行の第171号から号毎に内容・規格を変える斬新なリニューアルを行っている⁴。172号は折目に従って折ると袋になり、173号は広げるとカレンダーになる体裁。毎号新鮮な特集記事とデザインが、読者の眼を楽しませている(図1)。

しかしながら、ニュースは美術館利用者にとってどの程度馴染み深い存在であると言えるだろうか。美術館によって配布方法や部数も異なるゆえ一概には言えないものの、短期間に多数配布する展覧会チラシや、学術論文集として参照されることのある研究紀要と比べれば、その知名度は劣りそうなものである。それでもなお、幅広い業務をこなす美術館の「今」を複合的に報せるニュースは、多くの美術館にとって欠かせない広報媒体の一つとなっている。そしておそらく数ある印刷物のなかでも、ニュースは最も各館の雰囲気や職員の人柄が窺えるものであると言えるだろう。

2. 「ひる・ういんど/HILL WIND」沿革

それでは、当館のニュースはどのような歴史を歩んできたのか、ここで一度振り返ることとしたい。「ひる・ういんど」創刊号が発行されたのは1982年9月の開館に先立つ同年8月。「展覧会より」「常設展示から」「シリーズ三重の作家たち」等、後に続いてゆくニュースの記事項目が初めて登場したのは開館後発行された第2号である。執筆陣は主に館内の学芸員で、時折外部への執筆依頼も行われている。学芸員以外の職員による記事も多く、その話題も展覧会や美術史に限定されず、教育、運営等多岐にわたる。当初は年間4号程度のペースで刊行されており、B5判の規格で、基本的に

全8頁。第74号までは、概ねこの形式が保たれることとなる(図2)。

開館から20年を経て美術館の増改築工事が行われた2003年度、当館ニュースにも大きな転機が訪れた。「ひる・ういんど」は20年74号の歴史にいったん幕を下ろし、新たに「HILL WIND」が創刊する(図3)。記事一本あたりの文字数は減少し、判型はより手に取りやすいA5判となった。記事の中身も、カラー図版豊富の読みやすい内容へと移行する。扱われるテーマは多様化し、同時並行で行われる多様な美術館活動が1枚の紙に凝縮された体裁となっている。2008年度には一度デザインリニューアルが行われ、展覧会紹介を軸にメイン記事1本とサブ記事3本で構成するスタイルが徐々に確立されていった(図4)。

ところが2012年度から、ニュースの発行回数は年間2回へと減少。この回数では、字義通り美術館の「ニュース」を発信するにはいささか無理が生じる。さらに、美術館の広報手段は、開館後30年の間に複雑化しており、ニュースを取り巻く状況はもはや創刊時のそれとはすっかり変わってしまった。

当館は、双方向的なコミュニケーションを可能にする新たな広報手段として、2006年から会員登録制のメールマガジンを月2回発行している⁵。さらに2013年3月には、より即時的な情報発信のために公式ツイッターの運用を開始した⁶。観覧料割引や読者プレゼント等の特典も多いメールマガジンは、パソコン・携帯電話合わせて登録者数が2500人弱(2013年12月)、美術館の日々の活動を子細に公開できるツイッターは2013年12月末現在でフォロワー数があと少しで1200に達するというところである。

ホームページの閲覧も、重要な情報取得ツールの一つと言えよう⁷。ホームページにはリンクが縦横に張り巡らされ、操作さえ心得れば短時間であらゆる情報を入手することができる。情報更新は随時可能であり、即時性も他媒体に決して劣るわけではない。

その一方、ニュースの記事を書き上げてから、実際に印刷物が納品されるまでに要する時間はおよそ二か月弱。情報の鮮度においては、紙媒体のニュースが他に一歩も二歩も引けを取ることは明白である。そうなれば、最も歴史ある情報発信媒体とはいえ、ニュースもその方針を改めて模索することが必要になる⁸。



図1 「エスプラナード」171-173号



図2 「ひる・ういんど」1-3号



図3 「HILL WIND」1-2号



図4 「HILL WIND」21、25、28号

3. リニューアルの経緯

このような状況の変化に伴い、2013年度から当館ニュースは再び規格・内容の刷新を行うこととなった。改変に際し、検討事項として挙がったのは主に以下の点である。

展覧会紹介に主眼が置かれ、旬の話題が掲載されることの多い「HILL WIND」は、かつての「ひる・ういんど」と比べれば「エフェメラ」的な性格が強まっている。発行頻度が年2回となった今、一過性の話題よりむしろ、配布期間終了後も読む価値のある話題を選択すべきではという意見が挙げられた。

また、時代の変化が背景にあるとはいえ、以前に比べ学芸員の文章を執筆する機会は確実に減少している。この事実に対し、危機感を募らせる声も寄せられた。

さらに、より実質的な問題として、従来の発行形式では展覧会担当者が繁忙期にメイン記事や特集記事の執筆を抱えるということ、かつニュース記事とチラシ等の内容がやむを得ず重複してしまうことも看過できない。多忙時にニュース記事の執筆が最優先される可能性も低く、貴重な広報手段を存分に活用することが難しい歯痒い状況が続いていた。

検討の結果、初代ニュース「ひる・ういんど」時代の読み応えを復活させる案が採用され、展覧会紹介にとらわれない長期的に読ませる誌面づくりが目指されることとなった。文字数が格段に増えたことにより、必然的に執筆労力も高まるため、今のところテーマ設定は完全に各自に委ねられている。全体の方向性や内容・テーマ統一の是非を含め、次年度以降さらに検討・改良を重ねる必要があるだろう。

表紙イメージに惹かれて本号を手にとった方は、巻頭記事に違和感を覚えたかもしれない。本号の執筆を担当したのは実に学芸員(館長含む)7名中6名。展覧会担当者の負担軽減は達成されているが、リニューアルの目的に合う内容を維持するためには今後相当な骨折りを要しそうだ。

親しみやすさや分かりやすさ等、リニューアルの結果、以前より評価の下回った項目も少なくないだろう。ぜひメールマガジンやツイッターも、併せてご覧ください。

1. 当館美術館ニュースは「ひる・ういんど」(1982-2003、1号-74号)「HILL WIND」2003-現在、1号-34号)とリニューアルに際し誌名を変更している。現在はバックナンバーの大部分が当館ホームページにて閲覧可能である。<http://www.bunka.pref.mie.lg.jp/art-museum/hillwind/index.htm>
2. 「美術館広報誌」「美術館情報誌」「美術館だより」等、呼称はさまざまだが、本稿では美術館の定期刊行広報誌全般に対し「美術館ニュース(ニュース)」という表記を用いる。当館の「ひる・ういんど」/「HILL WIND」然り、館に縁の深いものの名前が誌名とされる場合も多い。
3. 東京国立近代美術館ニュース「現代の眼」や同誌のリニューアルについては以下を参照のこと。松本達「美術館ニュースの今後—「現代の眼」600号発行を機に「現代の眼」600号、2013年6-7月、3頁
4. 福岡市美術館情報誌「エスプラナード」については、福岡市美術館学芸員神保明香氏に情報をご提供いただきました。
5. 当館メールマガジンについては以下を参照。<http://www.bunka.pref.mie.lg.jp/art-museum/mailmagazine/index.htm> メールマガジン発行の経緯については以下を参照。生田ゆき「メールマガジン絶好調!」「HILL WIND」12号、2006年8月
6. 公式ツイッターのアカウント名はmie_kenbi。運用方針については以下を参照。http://www.pref.mie.lg.jp/socialmedia/museum_twitter.htm
7. 当館公式ホームページのURLは以下。<http://www.bunka.pref.mie.lg.jp/art-museum/> ホームページの作成・改変過程については以下を参照。石崎勝基「ウェブサイト連路化計画中間報告」「HILL WIND」16号、2007年10月/原舞子「ホームページ・リニューアルに向けて」「HILL WIND」26号、2010年10月 今年度9月に行われた、県の文化行政のありかたに関する調査によれば、「文化芸術の鑑賞を行うにあたり、情報の入手手段として現在利用しているもの」として、20代・30代の回答者は「インターネット検索」を最も多く選択している。(20代74.7%、30代63.9%)「今後の文化行政のありかたに関する県民意識調査報告書」三重県環境生活部文化振興課、2013年10月、36-37頁
8. なお、当館では「研究論集」の刊行は定期的には行っていない。「年報」は現在ホームページ公開に一本化され、印刷は行われていない。

※各URLは全て2013年12月21日最終アクセス

古色に同調した絵画—中谷泰展その後

田中 善明

展覧会が開幕してしばらくすると、自分のなかでとらえていた作家像が変化することがある。今回の洋画家 中谷泰の展覧会でも、各展示室を行ったり来たりしているうちにこれまでとは異なった印象をもつようになった。それは、この画家の美意識のなかに寂れたものに対する関心が想像以上に高いのではないかということ、そして、時の経過で古びたものに備わる美の魅力と同質のものを表現しようと試みていたのではないかという印象である。

初期の中谷は、《都会風景》など堅実な風景描写を経たのち、《楽園追放》などの西洋美術の伝統的テーマに挑戦したり、セザンヌやゴーギャンあるいはルソーなど近代美術を切り拓いた画家たちに傾倒したりして、自らの表現のなかに取り入れた。こうした表現方法だけに限って言えば、振れ幅が小さくなりスタイルが確立したのは、1950年代はじめの頃からで、鮮やかな色彩は落ち着きはじめるとともに、少しくすんだ表情を見せるようになる。この時期の一連の静物画や、労働者を描いた作品にも、そうした「くすみ」を見て取ることができるが、1950年代半ばから始まった炭坑などのシリーズで、画面は、より古びた印象をもつ。たとえば、1960年の《陶土》(図1)に見られる画面表層の灰褐色に注目すると、この色合いは、中谷泰が身近なものを芸術にまで高めたと褒め称えたシャルダン(1699-1779)の静物画の背景に共通するものをみることできるし、もっと時代をさかのぼれば、エル・グレコ(1541-1614)の特徴ある空の表現の「くすみ」を思い起こすことができるかもしれない。上記のようなすぐれた画家たちは、作品が時間の経過とともにどのよう



図1 《陶土》1960年 油彩・キャンヴァス 個人蔵

に古色を帯びるのか、将来の色調の変化を予測して描いていたはずで、時に修復家の過度なクリーニングでその予測が裏切られることもあるが、描かれた当初は鮮やかな画面であることは致し方ないことである。もし、描いた時点から古色をあえて要求するならば中谷が行ったように、「よごし」を入れる他に方法はない。それを灰褐色の油絵具だけで行うことは、あまりにもわざとらしい結果となることから、中谷は木炭を援用することになった。一般的に木炭は、油絵の下素描の段階でなら使用することがある。しかしこの画家は、仕上げの段階においても木炭の粉が付着しやすいように、画面の摩擦抵抗を残した薄い絵具層を保持し、木炭の黒を完成間近の表面に擦りつけている。さらに付け加えると、木炭が表層にあることで、以降の中谷作品はとてデリケートな画面となった。これに対し評論家の針生一郎は、炭坑を描いた中谷の作品について「マチュールへの神経質な顧慮や細線による心理的な暗示の意図がめだって、イメージの結晶に夾雑物がまじっているようだ。」と批判したこともあるが(『美術批評』1956年7月)、その後は「屈託と感傷にみちた表情のなかで、少しずつ心象が深まってきたのが感じられる。」と、同シリーズの印象が変化している(『朝日新聞』1960年5月3日)。

いずれにしても、中谷泰の芸術の代名詞ともいえる陶土や炭坑の作品は、削り取られた土の呼吸を通してそこで働く人々を高らかに歌い上げているだけでない。この画家は地層を深く掘り下げることで露わになった時間の重なりにも魅力を感じ、それを絵画の古色と同調させて描いていたのかもしれない。



参考写真 川口工場地帯(中谷泰撮影)

蕭白ショック!! その後

道田 美貴

2012年、千葉市美術館と三重県立美術館において、【蕭白ショック!! 曾我蕭白と京の画家たち】と題した展覧会を開催した。先行する蕭白研究を踏まえつつ、蕭白前史の検証と同時代画家との比較、蕭白作品の編年を試みるなど、先行する蕭白展にはない視点を加えることを目指し、一方では、蕭白作品の博捜にも力を注いだ¹。展覧会の準備段階で、多くの作品を調査させていただく機会に恵まれ、真贋や展覧会構成、他作品とのバランス等について協議を重ねながら、《草子洗小町図屏風》(個人蔵)など、展覧会初出品となる作品も紹介することができた²。

展覧会は無事に幕を閉じたが、蕭白研究でなすべきことは多い。未紹介の蕭白作品と、それを上回る数の贋作ものこる³。展覧会後も国内外を問わず情報収集を続け、興味深い蕭白作品と出会う機会も少なからず得た。ここでは、その中から新出の《許由巢父図屏風》を見てゆきたい。

六曲一双の《許由巢父図屏風》は、津市内の旧家に伝わるもの。許由巢父といえ、ともに古代中国の伝説的高士。許由は、帝堯の国を譲るとの申し出に対し耳が汚れたと颍川でその耳を洗い、巢父は川の水が汚れたと言いついに水を飲ませずに帰る。高潔の士を描くこの伝統的画題を、蕭白は、《許由巢父・伯楽図屏風》(メアリー・グリッグス・パークコレクション)、《許由巢父図襖》(三重県立美術館)でも手がけている⁴。

今回紹介する作品は、左隻に耳を洗う許由、右隻に後姿の牛と巢父を描く。細く揺れるような描線で描かれた人物の手足と、没骨風の墨面で表される衣の表現が特徴的であり、略筆で描かれたその画風は、《布袋蘆雁図》(松阪市・朝田寺)、《李白観瀑図屏風》(三重県立美術館)などと近い。《李白観瀑図屏風》とは、背景に大胆に配される樹木の表現も近く、画風は第一次伊勢滞在時の特徴を示す。落款は、左隻に「蛇足先生十世曾我蕭白暉雄図」の署名と花押、「暉雄」(朱文方印)、「蕭白」(朱文方印)、右隻に、「曾我暉雄蕭白道人画」、花押、「虎道」(白



《許由巢父図屏風》個人蔵 上段:左隻 下段:右隻

文方印)、「如鬼」(朱文外方内円印)。「蕭白」、「虎道」、「如鬼」に欠損は少なく、現存する蕭白作品の中でも早い時期のものである可能性が高いことを示す。また、「蛇足先生十世曾我蕭白暉雄図」の署名は、蕭白が伊勢滞在時の早い段階で描いたとされる《小野妹子・迹見赤柁図》(津市・上宮寺)の署名と似る。画風、落款を考慮し、蕭白が第一次伊勢滞在時(宝暦8-9年、1758-1760年頃)に描いた作品であると考えておきたい。

最後に、本作が初期作であるということに加え、「暉雄」(朱文方印)が押されているという点も特筆しておく。同印は、《梅図》(個人蔵)が唯一の使用例と考えられていたが、初期作品の特徴を示す《許由巢父図屏風》に用いられている点は、この印の使用時期を考える上で興味深い。蕭白ショック!!展後も、蕭白に関する新たなデータを蓄積している。引き続き、基礎データの充実に努め、今後の蕭白研究に繋げていきたい。

1. 三重県立美術館では、4度目の蕭白展。開館5周年記念【江戸絵画の奇才 曾我蕭白展】(1987年)は、蕭白を単独で取り上げた大規模な展覧会、開館10周年記念展【その後の蕭白と周辺】(1992年)は、初回の蕭白展以降に発見された未紹介作品や蕭白の弟子たちの作品を含む展覧会、【江戸の異才 曾我蕭白展】(1998年)は、アメリカからの里帰り作品を含む大規模展覧会。また、2005年には、京都国立博物館において、最大規模の蕭白展が開催された。

2. 伊藤紫織氏「曾我蕭白筆 草紙洗小町図屏風」(『國華』第1408号)に詳しい。

3. 後世の贋作から、比較的蕭白と近い時代の作品、あるいは工房作の可能性まで含めて考える必要がある。作品自体を芸術的に評価することはできないが、長く正当な評価を受けることのなかった蕭白の全体像を構築していく際には避けられない問題であり、蕭白作品とあわせて博捜する必要がある。

4. 前者は、宝暦(1751-63)末から明和(1764-71)期頃、後者は明和4(1767)年の第二回播州高砂滞在中に描いたと考えられている。蕭白作品の博捜および基礎データ作成は、公益財団法人ポーラ美術振興財団の助成により行っている。

毛利 伊知郎

三重の美術館では、コレクション展示以外に年間数回の展覧会を開催しています。こうした企画展には、開催までに長い期間を要するものも少なくありません。当館では、既に2015年以降の展覧会についても企画の検討や準備を始めています。その中で、私が直接関係している主な企画には、「日本美術の1940年代」、「舟越桂」、「私たちは立体表現をどう見てきたか」(名称は全て仮称)などがありますが、ここでは「日本美術の1940年代」の準備状況についてご紹介しましょう。

この展覧会は、先の戦争(アジア太平洋戦争、十五年戦争)が終わってから70年を迎える2015年に開催できないかと考えて準備を進めています。当館では1995年から99年にかけて「日本美術再見」というシリーズ名で、日本の1910年代、20年代、30年代の造形表現を検証する展覧会を三度開催しました。この展覧会はこれらを受けて、時代の大きな転換期であった1940年代の日本美術を対象に、その再検討を行おうとするものです。

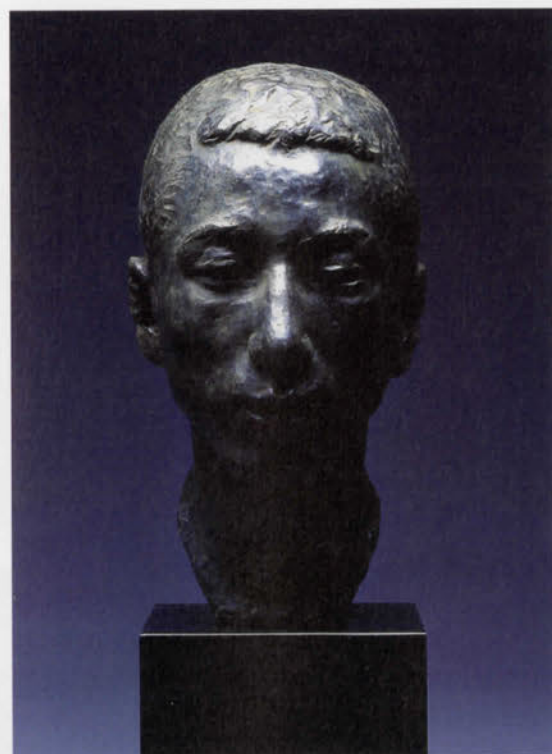
この展覧会は当館にとっては長年の課題でした。「日本美術再見 III 1930年代」を1999年に開催した後は、館外の方々から「40年代展はどうなっている?」と何度も尋ねられました。いくつかの事情から延び延びになっていたのですが、戦後70年を目途に開催しようと決心し、数年前から美術史と隣接領域の先行研究などの文献調査を行いながら調査を進めてきました。また、近年は展覧会の構成、出品候補作品などの検討も行っています。

こうした調査研究を通じて、私はこの時代の美術に対する見方の一つとして、「連続」と「不連続」という視点が有効ではないかと考えるようになりました。これまでの日本近代美術史では、1945年夏の終戦(敗戦)を境界に「戦前(戦中)」と「戦後」に分けて考える―「不連続」を強調する見方が大勢を占めていました。終戦とともに日本は生まれ変わり、美術の世界でも戦前とは異なる新しい美術が創造されるようになったという考えです。

しかし、考えてみれば、この一見単純明快な考え方には疑問が残ります。終戦(敗戦)を機に作風を一変させた作家も多数いました。しかし、その一方、戦前の活動を戦後も継続・発展させた作家も存在しました。さらに、「連続」と「不連続」という言葉では語り尽くせない複雑な関係が、戦前(戦中)と戦後との間にはありました。

実は、近年の日本史や文学史では、戦前(戦中)期から戦後への「連続性」に光を当てる研究が目立っています。美術の分野では昨年神奈川県立近代美術館で開催された「戦争/美術 1940-1950 モダニズムの連鎖と変容」展のように、連続性を考慮に入れてモダニズムをキーワードにこの時期の絵画を展望した展覧会も開催されるようになりました。しかし、戦前(戦中)から戦後への連続性を重視する美術史観は、一般的ではありません。

今度の展覧会では、絵画だけではなく彫刻、工芸、写真、デザイン、建築なども含めて、この時期の造形表現の諸相を検証しようと企てています。2015年といえば、まだ先のことに思いがちですが、残された時間は長くありません。今年1年、さらに準備のスピードを上げていきたいと思っています。



柳原義達《山本格二さんの首》1940年



柳原義達《高瀬さんの首》1948年

原 舞子

以前から気になっているものの、きちんと向き合う時間をとれずにいるものがある。「額縁」という存在である。

学芸員として文字通り「作品に触れる」機会も多く、額縁の取り扱いや保存が身近な事柄である一方、展覧会企画や展示の際には、額縁という存在が第一に考慮されることは少ない。大抵の展覧会カタログには額縁はトリミングされ掲載されないことや、作品の輸送方法や修復を検討する際に、あるいは作品を展示室に並べてみて初めて額縁の存在を意識するようなことも多々ある。もちろんこれは筆者自身の意識の低さと反省も込めて、ここでは試みに近代日本の画家たちの側から額縁を見てみたいと思う。

日本で最初の洋風額縁商「磯谷商店」の初代店主・長尾健吉の回想によると、明治22年頃、フランスから帰国した画家・山本芳翠の「額縁をこしらへて見たらどうか」という勧めにより、芳翠から渡された額縁製造法を書いたフランス語の本を研究して制作を始めたという。その後、黒田清輝、和田英作らが「磯谷額」に入れて作品の出来映えを試したという逸話も伝わる。

額縁にこだわりをもっていた画家として名前を挙げるならば、まずは岸田劉生である。『劉生日記』を読んでいると、足繁磯谷商店に通い額縁をあつらえたり、仕上がった額に自作を入れて「大へんよく合ふ」と喜ぶ劉生の姿に出くわす。劉生といえば、まわりに金の格子模様をついたシンプルな額、通称「劉生縁」も有名である。山下新太郎はフランスのアンティーク縁の蒐集に熱心で、自らも額縁を制作していたという。舶来の鏡の縁を古道具屋で探して自作に流用した小出橋重、貴重な古裂をマットにあしらった岡田三郎助、パウハウスの影響のもとスチールパイプを額に用いた三岸好太郎。わずかな例ではあるが、画家たちの創意工夫が額縁の中に見え隠れしている。

絵画作品と鑑賞する私たちとをつなぐ額縁。もう少しその存在に近づいてみたいと思い直している。

表紙解説

「ア・テーブル!ーごはんだよ!食をめぐる美の饗宴―展」より
吉田 映子

タイトルが妙である。「たべる」という動詞の主語は、「地球」。この巨大な天体は、食物連鎖、すなわち「食べる」と「食べられること」の舞台となりはしても、担い手となることはないはずだ。また、その地球が一体何を食べるのかという目的語も宙に浮いたままである。

3枚のパネルにわたる大画面には、確かに食べ物と見せそうなモチーフがある。横を向いて熱心に口をうごかす大きな顔が大海から引き揚げているのは、マグロの赤身だろうか。青ざめた大きな手がキノコをさし出し、巨大なナイフが大地を切り裂く。スイカの山脈から流れ出るスパゲティの川には、フォークが突き刺さっている。

ここでは、食べ物への徹的なまなざしと惑星規模の地殻変動が、混然一体となっている。「たべる」行為に生じる主客の関係が無化され、その悦楽が無心に謳われているかのようだ。

高度に精神化された人類の食事を尻目に、「咀嚼は太古の意志を取り戻した」¹⁾。

1. 大量のイチジクを浴びるように食べる、という経験について記した一篇より。ヴァルター・ベンヤミン、藤川芳朗訳「食物あれこれ」『美食文学大全』新潮社、1979年、237頁



岸田劉生《麦二三寸》(部分) 1920年 油彩・キャンヴァス 三重県立美術館蔵



近藤重樹
《たべる地球》

2012年
油彩・パネル/227.3×436.5cm
高橋コレクション蔵/copyright the artist, courtesy ShugoArts